

励み与え回復手助け

園芸療法士

中西 保太郎さん

編集委員

インタビュー

草花がもたらす治療の効果は？

患者の歩み配慮しケア

「園芸療法士の公的資格も制定し、私はその1期生。この適寿リハビリテーション病院には私を含め、3人が働いている」
 「どんな人を対象に。」
 「園芸に興味がない、という人もいます。」「消極的な人には、草花を病室に持って行き『今、こんなのが咲いています』と話し掛ける。反応が変わることも。中庭にもいろんなものを用意している。青のいいラベンダーなどのハーブやお草」

中庭で笑顔を見せる中西保太郎さん。中東の砂漠で植林に携わった経験もある＝神戸市長田区花山町2（撮影・斎藤雅志）



■なかにし・やすたろう

1955年生まれ。香川大卒。大阪や神戸の造園会社などを経て2002年に兵庫県立淡路景観園芸学校園芸療法課程に入学。03年に県認定園芸療法士資格を取り、適寿リハビリテーション病院へ。園芸療法研究会西日本の事務局長も務める。尼崎市在住。

「初めはプログラムを進めるのに一生懸命だったが、経験を重ねるうちに相手の立場になることが一番大事だ分かってきた。今、話したいのか、何に興味があるのか、反応を見ながら柔軟にプログラムを変えている。昔、染め物をしていたとき、藍の種を分けてもらって一緒に藍染め物をしていたことも。療法は保険の対象にはならないが、患者さんが笑顔になったり、変化が生まれたりすると、やってよかったと思う」

「園病中の子どもたち、幅広く応用できる可能性を感じる」
 「公園工事の現場監督をした経験からも、街中の公園はもっと多目的に利用できるのでは。例えば、閉じこもりがちな高齢者が園芸療法を受けられる場になれば、介護予防にも役立つだろう。園芸療法が日本に入ってきて約15年、自分の時間や身近な人を大切にして生きることが豊かだと感じる人は今後、増えていくだろう。園芸療法の良さを広めていきたい」

「ひとこと」 園芸療法が行われる中庭の草や木はどれも、みずみずしかった。土作り、水やり、草抜き。表には見えないが、中西さんの多くの手が入っているのだそう。
 しぐさ。泣いても仕方がないのに涙が出る。そんな時、人よりの何より、物言わぬ木々や花に慰められることが確かにある。終末医療の現場にも広がりつつあると聞く。園芸療法がもっと身近な存在になるように願う。

平成22年10月11日(月)
 神戸新聞(朝) 夕版
 4頁